

所属・資格 教育学科・准教授

申請者氏名 間篠 剛留

研究課題		批判的教育学の視点によるラーニング・コミュニティの再検討
報告の概要	研究目的 および 研究概要	高等教育におけるカリキュラム改革としてのラーニング・コミュニティ（LC）は、単一のテーマをめぐる複数のコースを学生に共同履修させることによって、知識の孤立状態と学生の孤立状態の両方を克服しようとしてきた。米国を中心に展開してきたこの取り組みは、既存の大学の仕組みをできるだけ残したまま、学生や教員のコミュニティを構築しようとする試みであると言える。しかしながら、コミュニティという観点から大学や高等教育を考えたとき、よりラディカルな構想も可能である。本研究は、現代の高等教育を痛烈に批判する批判的教育学の論者に注目し、彼らの高等教育論やコミュニティ論を分析し、カリキュラム改革としてのラーニング・コミュニティを相対的に見る視点を得る。
	研究の結果	LC論の歴史の変遷をたどると、初期の実験的プログラムでは、学寮を活用し、特定の文献を通じてデモクラシーの実践を目指す知的共同体が形成された。20世紀後半以降のLCは、学習の共同性を重視するものの、学ぶ内容には踏み込まず、多様化する学生層への対応が優先されるようになった。特に、ティントによるLC論では、学生が孤立せず、学習環境の一体化が強調されている。しかしそこでは、知識のあり方や教育における権力関係への言及は乏しい。一方、批判的教育学に関わるベル・フックスの高等教育論では、大学の教育が白人優位主義や資本主義的家父長制のもとにあると批判し、学びの場における権力構造を問題視する。彼女は、単に学生同士が共に学ぶだけでなく、全員の声が等しく尊重され、異なる経験が承認される場こそが真のコミュニティであると主張する。フックスの視点は、コミュニティの形成が学習の方法や環境だけでなく、学ぶ内容や発言機会の平等にも関わることを強調している点で、従来のLC論とは異なる。
	研究の考察・反省	本研究では、高等教育におけるコミュニティ概念の変遷をLC論とベル・フックスの教育思想を対比しながら検討した。その結果、LC論は学習環境の改善を通じた学生のつながりの強化を重視する一方、フックスは大学教育に内在する権力構造の変革を求めていることが明らかとなった。特に、LCが学生の学習共同体の形成に寄与するものの、知識の選定や発言機会の平等には十分な配慮がなされていない点が課題として浮かび上がった。 一方で、本研究の限界として、具体的な教育実践との関連が十分に検討されていない点が挙げられる。今後は、LCとフックスの視点を統合し、学習内容や教育方法における公平性を考慮した実践的アプローチを探ることで、より包括的な高等教育のあり方を提示する必要がある。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 ・間篠剛留「高等教育におけるコミュニティ概念の再検討——ベル・フックスの思想を手がかりに」日本大学教育学会秋季学術研究発表会、2024年11月3日。 ・間篠剛留「アメリカにおける教職の専門職性に関する議論の展開——古典的なものから新しいものへ、そしてより複雑なものへ」日本教育学会第83回大会ラウンドテーブル12「アメリカにおける教職の専門職性の歴史的展開と現代的課題」（間篠剛留、古田雄一、西野倫世、原圭寛、石嶺ちづる、森本和寿）、2024年8月29日。	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 ・間篠剛留編著『教育に出会いなおすための教育思想』教育開発研究所、2025年。	
		※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。